

敢えて企業経営者に問う “若者のバリュースアップ” —その1—

小泉 鐵夫 (こいずみ てつお) SEF コミュニケーション研究会

いきなり「敢えて問う」と言われても、企業経営者の方々は戸惑うことであろう。あるいは、突如なまくら刀で斬り掛かる隠居老人と、まともに剣を交える気にもならぬかもしれない。そこで、本連載の前号までとの多少の重複をいとわず、「敢えて問う」に至る思考経過の説明から始める。今号では経過説明をし、次号では理想と現実、提言を経て、「敢えて企業経営者に問う」へと筆を進めたいと思う。

—— 先ず、われわれの周りを見回してみよう ——

1. 現代日本の世相をどう捉えるか

筆者はあるべき人間社会として、「けじめ、思いやり、厳しさを営みの根元とする社会」を思い描いている。しかしながら、現代のわが国

の世相を見るに、これら三要素の欠如により発生する事象の余りの多さに、愕然とせざるを得ない。国内で多発する不正、不祥事、犯罪ばかり、国際社会での国辱的行為・不行為しかりと言えるであろう。

これらの実態は、政治、経済、教育、文化、スポーツなど、あらゆる分野に見られ、枚挙に暇のない状態と言える。しかも、そのような傾向は、今後ますます強まりそうな気配であり、日本古来の美風と誇りを着々と破壊しつつあるように思える。

いつから? 何故? そのようになったのか……この点の検証はほかに譲り、象徴的現象を例示してみよう。

- ① 政治態様：国際音痴、野党の軽薄不全症候群化、軽量政治家、パフォーマンス政治、





政局先行 など

- ② 企業行動：安直なリストラ、金融界の悪辣化、敵対的企業買収、利益至上主義、派遣依存 など
- ③ 学校教育：教師のサラリーマン化、学級荒廃、PTAの跋扈、イジメの悪質化、学力の低下 など
- ④ 社会風潮：拝金主義の横溢、偽装行為、ニート現象、乳幼児の虐待、子供の自殺、謝罪劇 など
- ⑤ 日常文化：地方文化の衰退、サッカーの芸能化、お笑い文化の低劣化、不見識な民放番組 など

これら個別の現象に関する筆者の見解は、紙幅の関係で割愛せざるを得ないが、いずれの背景にも、三要素の欠落と真のコミュニケーションの不足、不在が感じられてならない。

2. 現代日本の若者をどう捉えるか

前述した如き世相の中で、現代の若者は、どのように生育されたのであろうか？ 若者に媚びることなく、また、若者からの反撃を恐れずに、筆者の感じるまを列挙してみる。やや過激な表現を用いるが、明確に実態を浮き彫りにすべく考えた結果とご理解いただきたい。

(1) 否定的イメージ

<強度に自己中心的である>

- 自立心不在の他力本願……幼児教育の過誤から受益願望の先天化
(一方的な甘え構造の体質化)
- 仲間内でのイジメ横行……幼稚性による同質的集団希求の稚行
(異質性排除による精神安定化)

- 公共空間での迷惑言行……存在消去および存在誇示の二律両棲
(隔絶の世界没入による不安逃避)
- 組織内融合能力の欠如……有機的連携意識の無意識的消去
(人間関係希薄化による煩雑性回避)
- 強弁的他者非難の巧者……責任回避願望の先制他者攻撃
(自己防衛策としての本能的危機管理)

<ケジメ思考が貧弱である>

- 自己抑制能力の不体得……幼児期に忍耐、我慢の体験的教育機会を逸失
(発作行為多発症候群)
- 制約忌避の幼児性持続……社会適合化訓練ならびに本能矯正学習の未通過
(唯我独尊的虚弱体質)
- 棚ぼた的<お待ち組>……向上心、競争意識不在による無気力の日常化
(先天的無自覚敗残者)
- 目標喪失の成行き主義……挫折感による上昇志向喪失で<下流君>甘受
(後天的自覚性敗残者)
- 雷同による疎外感回避……孤立化への強迫観念による“群れ環境”願望
(自立観念喪失の野合)

(2) 肯定的イメージ

<既成概念に囚われない>

- 新生活スタイルの発芽……因循姑息・旧習からの脱皮による非同質的生活の享受
(行先不透明)
- 発想とプランの新規性……脱模倣および脱改良主義による本質的な新規事業の起業

- （不確不安定）
- 多面複合的な思考習慣……マルチ思考／マルチ人材による斬新的複合企業の誕生
（規制不対応）
- 新しい日本文化の創出……国境越えの発想と行動力による和魂洋才的文化の萌芽
（国籍不明確）
- ボランティア的な活動……無償奉仕活動への自発参加は“いたわりの心”の発露
（無条件賞賛）

＜対欧米劣等意識がない＞

- 多分野での国際的活躍……自国および自己に対する自信の芽生えと実力の向上
（過信性誤謬は？）
- 他国語での対話力取得……海外渡航の容易化による自主的体験学習の機会増
（真性日本語は？）
- 日本文化の能動的発信……国際的な日本文化再評価は“日本”理解に繋がる
（表層的伝搬に？）
- 他国文化の積極的導入……他国文化の理解と導入は真の国際化を下支えする
（和風の継承は？）
- 島国的根性からの解放……ちぢみ思考から解放された対等感覚での国際進出
（国内空洞化に？）

否定・肯定の両側面から現代の若者像を描いてみたが、これは筆者の私見であることは言うまでもない。また、すべての若者が、すべての事象に当てはまると考えているわけではなく、上記の＜否定的イメージ＞とは無縁の、素晴らしい若者が数多く存在することは承知している。あくまでも、全体的傾向として感ずるところを書きつらねたものである。なお、肯定的イメージと評価しながら、その先に余計な不安を感じてしまう点は、筆者の反省するところでもあるが、杞憂に終わることを念しながら、付記した。

3. 日本企業の将来をどう捉えるか

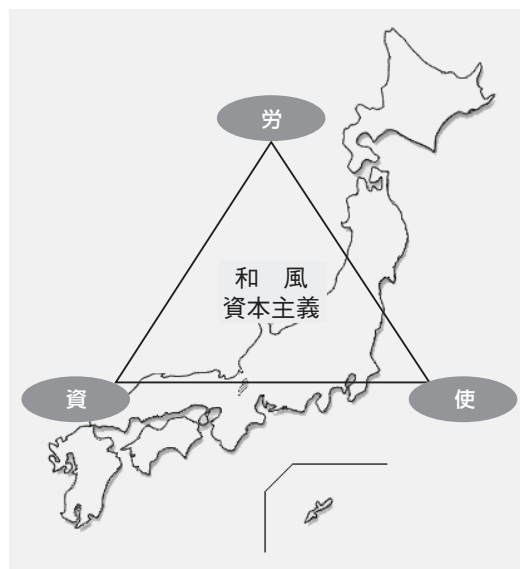
① 和風資本主義

日本における資本主義の歴史を紐解くつもりはないし、筆者には荷が重過ぎる。しかし、現在の日本経済の根幹が、戦後の復興時期に培わ

れた日本独自の資本主義体制に根ざしていることは確信できる。筆者は、その独自性を高く評価し、あえて“和風資本主義”と称するのである。

すなわち、敗戦による荒廃から立ち上がるべく、全国民が一体となって作り上げた体制であり、「先ず、資本ありき」ではなかったはずである。徹底した産業育成政策の下、労使一体となって、知力と体力を傾注したのである。高関税による保護貿易、基幹産業補助基金、外資参入障壁、企業課税の低減、公共投資によるインフラ整備など、いずれも企業努力や乏しい民間資本では対応できないものであった。長時間低賃金労働を甘受しながら、国民はそれら諸施策を税金で支えてきたのである。多くの国民が、日本経済と所属企業の発展の先に、自身の幸せな将来を期待したからである。一部資本家の主導と恩恵による復興ではなく、「官・民一体」と「労・使・資三位一体」の賜であり、世界に冠たる日本独特の自由経済体制なのである。余談になるが、明治維新後の産業興隆も同様な事象と見ることができ、わが国の伝統的「和の精神」の発露とも言えるのではなからうか。

一方、ある種の思想にかぶれた労働運動と、労組を煽る政党や思想集団が興隆した事実もあった。しかしながら、多くの犠牲を払いながらも、国民の賢明な選択と政府の迷走しながらの諸政策により、それらの排除に成功したのである。無論、現在においても多少の残滓は認めら



れるが、少なくとも、不毛な階級闘争的労働運動は過去のものと言える。

② 和風資本主義は崩壊しつつある

昨今「会社は誰のもの？」などという議論が横行しているが、“和風資本主義”の観点に立てば、答えは明白である。にもかかわらず、議論が噴出するのは、取りも直さず“和風資本主義”が危機を迎えている証左と考える。資本・資源・国土に乏しい日本にとって、人的資産に基軸を置く“和風資本主義”以外に取るべき道があるはずもなく、その崩壊に繋がる芽は一刻も早く摘み取らねばならない。崩壊を招く恐れべきプロセスを予測してみる。

◎敵対的企業買収は“和風資本主義”の崩壊に繋がる

資本の論理のみの追求は、「労・使・資三位一体」の企業風土を崩壊し、労使の活力を削ぐ。「自分たちの会社」という帰属意識と誇りが低下し、所属企業の永続化への意欲が低減する。敵対者による支配と、次なる敵対者への怯えは、優秀な人材の大量流出を生む。

◎正社員の減少は“和風資本主義”の崩壊に繋がる

帰属意識の低い外部者に“滅私の精神”は望めず、報酬のみによる絆となる。継続的社内教育により育成されるべき正社員の減少は、企業の基礎体力を弱体化する。刹那主義的な労務費削減政策は、企業イメージを損ない、優秀な人材の雇用に破綻をきたす。

◎資本至上主義は“和風資本主義”の崩壊に

繋がる

株主への過度の配慮は、近視眼的経営を生み、将来への備えが怠り勝ちになる。成果配分における配当偏重は、従業員の利益意識を低下させる。「労・使・資三位一体」の美風を汚し、企業の品格・活力・信用の失墜を招く。

◎利益至上主義は“和風資本主義”の崩壊に繋がる

社会性を無視した利益追求は、企業倫理の崩壊を招き、強いては人倫を犯すことになる。企業倫理崩壊により不祥事が続発し、経営者の謝罪画面が茶の間のTVを賑わすことになる。情けない経営者のペコチャン笑劇場は、企業と経営者に対する失望感を蔓延させる。

◎金融界悪辣化は“和風資本主義”の崩壊に繋がる

最大の使命である「産業の支援、育成」を忘れた利益至上への亡進は、本末転倒の結果を生む。産業界からの収奪に飽き足らず、サラ金と組んだ庶民からの収奪が加速する。本来の機能の劣化と不正行為による信頼の失墜は、資本主義経済の根本を揺るがす。

以上“和風資本主義”崩壊の芽について、企業活動の実態からいくつかを例示してみた。

ここでは、崩壊後に予測される企業・産業界の具体的な地獄図には触れず、「企業経営者の猛省を促し、自浄を待つばかり」と申すに止めておこう。

●執筆者略歴

元(株)東芝勤務、現在はNPO活動中

ヒートポンプ・蓄熱白書

財団法人ヒートポンプ・蓄熱センター 編

B5判 4色+1色 370頁 定価3 675円(本体3 500円) (株)オーム社発行

◆本書の特徴◆

地球温暖化防止とエネルギーの安定供給の同時達成へのキーワードは、「脱炭素」「脱燃焼」「エネルギー効率の高い社会の構築」です。クリーンで無尽蔵な「空気の熱」をはじめ、各種の未利用エネルギーを高効率に活用する「ヒートポンプ」は、地球温暖化対策の切り札として国内のみならず、海外でも大いに注目されています。

本書では、省エネ・省CO₂対策面で格段に有用で現実的な温暖化対策技術である「ヒートポンプ」と「蓄熱」に関する技術動向、導入状況、政策、環境性、開発の歴史、海外動向、統計データなどを網羅し、本技術の全貌を明らかにします。

